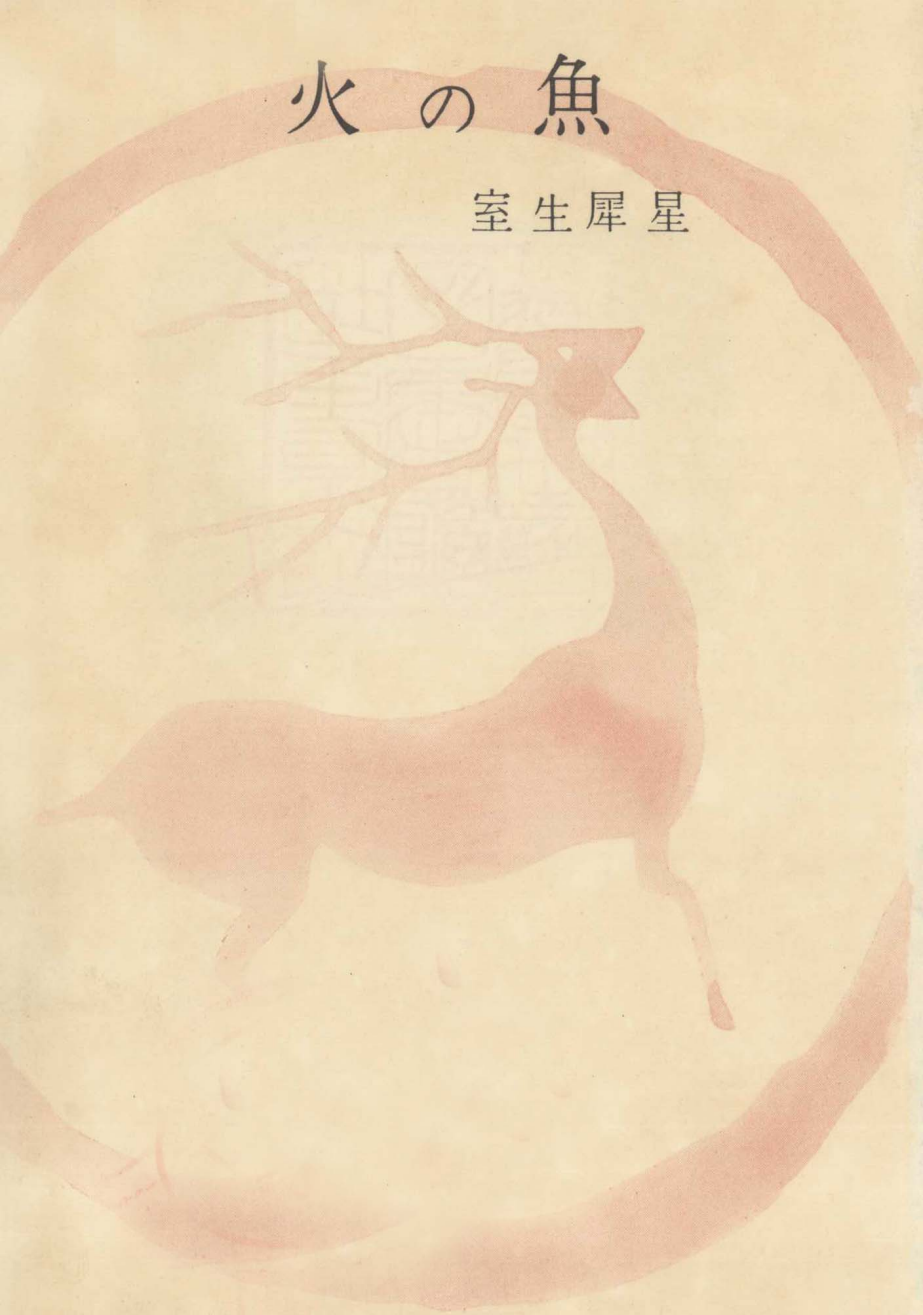
火の魚

室生犀星



中央公論社

火の魚 奥附

昭和三十五年三月二十一日 印刷
昭和三十五年三月二十五日 發行

著者 室生犀星

發行者 栗本和夫

印刷 凸版印刷

發行所 中央公論社
東京都中央區京橋二丁目一番地
振替東京三四番

價 二九〇圓

©一九六〇
檢印廢止

目次

火の魚　三
衢のながれ　二三
なやめる森　五七
あまい子姉弟　七九

運命論者　一一一
朝顔　一三一
借金の神祕　一四三
藤の宮の姫　一六五
玉蟲　一八七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

火の魚

感情も何も見えないさかなといふものに、その生きる在りかを見たいばかりに、裏の大河の磧に出て、さかなをつかまへると池を作つて絶えず新しい水を引き、そこに放流して私はさかなを眺めて多くの日々を送つた。水も同じい流れを引いたものであり、石や砂も同じ大河の馴染みふかいものであるから、そこに放流されたら水中にゐる高慢さや素早い癖、驚いていなづま型に動くさかなの有様が見られるといふ私の考へであつた。川の形を取つた流れには淵も瀬も水段も、ふた側の石垣さへ両へりに築いてあつた。けれども多くのさかなは一ところに動かない姿勢をつづけ、ひどさうにあぎとの内の赤い物を見せ、呼吸を殺して潜んでゐた。見てゐてもちつとも溌剌さがなく、面白いものは皆失くなつてゐた。鱗の色に黒いつやが穏め、どうにでも勝手にしてくれといふふてぶてしさも見られ、反対に瀬の肌ざはりを物憂げに避けてゐるふうでもあつた。

人間の手にいちど握られると、さかなの驚きはその心にひどい衰弱を来たし、ぬらぬらしたものが剝がれると元氣がなくなつてゆくらしい、私はそのひどさうな様子ばかりが眼に留つた。

日は暮れ山が見えなくなり、私はそのさかなをそのままに磧の池に生かして置いて、仕方なく家に戻つた。鮠とか鮎は死にやすいので、大概、磧の池に置いて戻るのは鰍といふ鬼に似た顔の、手に握るとぐうといふ小さな鳴き聲を立てるさかながおもであつた。夜が明けて池に行つてみると、さかなはこしらへた瀬にも、深い砂場にもゐなくて、流れだけが昨日と何の變りがなく、こまかい小石の上をさらさら流れてゐた。このおもちやの池から一米離れて、大河の本流が盛り上つて滾つてゐた。私は池のまはりを見ても飛び出したふうもなかつたが、何時も本流の方に眼が惹かれて、湧きあがる早瀬に見とれた。そこは、さかななぞの形態が見きはめられない、奔流の混亂した水の層巒ばかりである。磧に置いたどういふさかなでも、翌くる朝までゐたためしがなかつた。私は遂に木箱で生簀を作り、そこに鮠や鰍をいれて置いたが、さかなはそのまま朝までゐた。生簀にははりがねの輪鍵がかかつてゐたからである。

私の初期の敍情詩は魚のことをうたつた詩が大部分で、青き魚を釣る人とか、遠い魚介とか、七つの魚とか、魚と哀歡とか、魚は木に登るとか、枚擧に遑なきまでにさかなの何かに觸れたいのぞみを持つてゐた。さかなはやさしく、女の人のどこかに似てゐて、ことさらに生きてゐるのを握ると、生き物の生きてゐることがはつきりと判つて來て、ちよつとの間、こころも彈む思ひであつた。澤山の詩を書いてみたが、どの詩にもさかなが夜中に監禁された池から遁れて、もとの大河の水襞に溶けこんでゆく一章さへ、私は詩に現はすことが出來なかつた。夜中にさかながどうして本流に逃げ出してゆくかが、つひに判らずじまひに私は年齡を取つてしま

つた。恐らく作り川の池からさかなは飛び上り、磧の石の間をすべつて行つて本流にぽちやんと飛び込んだものか、作り川のすそが本流に捌けてゐる水口まで行き、そこから、難なく本流の激しいいざなひに紛れ込んだものでなからうか、何時かはこのさかなの行方の遠いところを突きとめたかつたが、機會はなかなか來なかつた。

私は小説家といふ類ひ稀れな職業を持つやうになり、有爲の人間に不必要な馬鹿の性格が悉く役に立つて、衣食に事足りることを得てゐた。そこで最近偶然に燎爛の衣裳を着用した一尾の朱いさかなの事を書いて、私の知つたかぎりの女達をいま一遍ふりかへつて見ることにした。私の女友達は三十歳くらゐから三十七歳くらゐでみな死に、生きのこりの私はこれらの美しい死女の間をうろついて、あり餘るほどの日沒時を繰り返しては死女を呼び續け、その小説はそれだけで終つてゐた。そしていまはこれを一册の書物となる時期がゐて、裝本の表紙繪を私は選んだ。或有名な西洋畫家に手紙を書いて一尾の金魚が燃え盡きて海に突つ込んで、自ら死に果てるところを描いてほしいといひ、金魚は一尾で結構、ただし切火のやうに烈しさが見たいのですと勝手なことを書いて送つた。實際、私はもはや一尾の金魚が海に突つ込んで行くといふ光景よりも、一人の重い女體がそれ自身の體重に加へて、死ななければならない激越さで、髪のある方を海面に向けてただ眩ゆい瞬間に消えてゆくところを頭にゑがいて、書物の表紙繪を作ることにむちゆうになつてゐた。書物はその裝幀を造り上げたところで、何時もその書物とわかれを告げるのが、私のならひであつた。裝本の奥義は造庭の一部分にもまがふもので、

ただ飽きない本を造ることが目標なのだが、私はしつこく細かく飾り立てて、何時も書物の装幀は悲しい失敗をかさねてゐた。併し今度こそといふ氣合は西洋畫家からいま躰軀の調子を惡くしてゐて、當分かけないといふ斷りの返事を貰つてから、意氣込みが挫けて了つた。日本でも何人かをかぞへる畫かきさんに、金魚一尾描いてくれといふ簡單な依頼を自分が頼まれる原稿のやうに、すらすらと頼んだことも早計だと思うた。しかも自ら命を斷つために海に突つ込んでゆく、炎のやうなさかなを描いてくださいといふ、繪畫といふものの世界を知らないで書いた手紙がくやまれてならなかつた。私が畫家であつても、金魚の自殺するところなぞ、どう考へて見ても、描けるものではなかつた。

その日は花を生けかへる日であり、私は表通りの花屋に行つて花を選んで買つたが、そこの鋏や花瓶をならべた臺の上に、ふちを綠にそめた硝子の鉢が置いてあつて、追々に死んで遂に一尾だけ殘つた朱いさかながゐて、これも腹を横たへて死んで間もない、まだ柔らかさうな様子であつた。これを見たときに不意に魚拓をおもひついたのだ。家に戻ると女中に譯を言ひ、死んださかなを貰ひ受けたいと言ひ、魚拓といふものにして本の表紙にしたいと言つてやつたが、女中が歸つての話では死んでゐると見たさかなは、手にさはつて見ると未だ生きてゐるといひ、少しでも生きてゐるのに殺すことは出來ないと、斷られて戻つた。あのさかなはまだ生きてゐたのかと、さかなといふものは永い臨終の時間があるものだと思つた。翌日の朝、花屋の主人はわざわざ裏門から昨日のさかなは、今朝起きて見ると、死んで硬張つてゐたから持つ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

て參つたと、白紙に包んださかなを置いて歸つた。私は水で彼女を洗ひ、充分に水分を切り硯に墨をすつて魚拓にとる用意をはじめた。先づその姿勢が逞しく頭を下に向け、尾は天を蹴つて鋭く裂けてゐなければならず、一體の炎は燃え切つて蒼い海面のがらすを切り碎いてゆく降下狀態を、鱗目もあざやかに紙の上に刷らなければならなかつた。魚拓はむしろ精神力で生きうつしに出來るものだ、私は彼女のからだに墨を塗り、それを畫仙紙に何枚も寫して取つたが、ぬらぬらが邪魔をして墨の濃淡が禍をし、さかなの形だけは刷れたが、鱗、鰭、尾、眼球の悉くが揃つた無二の鮮明さは、いくら刷りかへても旨くあがらなかつた。一つのもえる火、炎、絕叫、やさしい中に烈しさのある逆樣の姿勢といふふうに、馬鹿男が緣側に出て一尾のさかなをこねくり廻した態は、見られたていたらくではなかつた。頭と心にある物が何でも爲し遂げられるといふ見當違ひの信念は、つひに最後の一枚を拓り上げたものの、自分で出來ない仕事の見きはめがつかずに、得意げにその一枚を訪ねて來た書物の係の記者に見せ、これを今度の表紙につかひたいと言つた。私は投書家のやうに記者の顏色をうかがひ、その顏色が眞劍さうな面持に變るのをこれは困つた事だと思つたが、記者は部長にもよく相談をして見ませうといひ、部長はどう言ひますか知らと記者は自分の說を述べないことで、もう魚拓は落第だと平常のこの人の性質から察して、あとの無言で私は絕望したのであつた。

日をあらためて見るうち、魚拓に墨を入れて尾にあるすぢ目や、鰭や鱗を眼にとまらないくらゐに加筆をこころみたが、それはこのさかなの在りのままの姿を冒瀆してゐる氣がして、そ

れも止めることにした。魚拓では、眼球だけは墨がきで後で入れるものださうであるが、併し日が經つにつれて魚拓の貧弱さが眼に立ち、机の上に展げて見ては、これはよさう、こんな子供騙しの魚拓で、何十萬も資本をかける書物の表紙繪にする輕卒は控へようと思つた。けれども頭の中で、一塊の炎となつた落下物が海ばらを眼懸けて、焼けただれて消えるといふ光景がおもひ切れずに殘つた。作家が作品を愛することは盲目に均しい、がむしやらな物だと私は想つた。とにかく誰かに魚拓をとることを頼んで見ようといふ氣になつたが、誰も適當な人がおもひ當らず、冷藏庫にいれて置いたさかなをまた取り出して、しつこく魚拓のしごとに取りかかつたが、さかなのからだに生きが失せ、最早墨を刷くことも至難であつた。私はその時突然一人の童女の顔を、折見（おりみ）とち子といふ婦人記者を眼にうかべた。童女とはいふけれど三十に近い婦人であるが、彼女の父は私と同郷で釣りを好み、釣つたさかなの大物は魚拓にして年月を記入し、つひに去年釣をしながらうとうとと寝入るやうに腦溢血の症狀で、釣竿を持つたまま多摩川の土手の上で亡くなつた人であつた。私はその魚拓を折見とち子に見せて貰ひ、釣りをしながら自分のいのちを亡くしたその父君が、川面に立つけむりのやうなさかなの命を印した拓本を、幾枚かの詩の原稿を讀むやうに眺めた。ずつと以前、作り川で生かして置いたさかなが、ひと晩のうちに何時も逃げてしまひ、毎朝それがどうして逃げたかが判らなかつたのに、いまは矢張り逃げる必要があつて逃げ出してゐたことが解るやうな氣がした。多摩川のさかなが折見とち子の父親を死にさそひ込んだ譯ではない、併しさかなの賑かな遊泳に父君は何時も

氣を奪られてゐたことであらうし、釣りの好きな人は夜晝となくさかなの眼と姿のうつくしさに、ぞつこん打ち込んでゐる人達なのだ。

折見とち子は父君が緣側で釣つて來たさかなに、墨を刷いては拓本にとつてゐるところを、釣りから歸つた日によく見うけた。さかなは山女魚、鮠、鮎などであつたが、それは指先で愛撫するやうにさかなを横たへる前に、酢でそのからだを洗つてぬらぬらを取り除き、鱗がかすかすになつたところに濃い墨をくはへ、鰭の先や尾のとがりにも注意ぶかい墨筆のこまかさを加へてゐた。折見とち子はそれらの樣子をまるで父君がさかなの繪を畫いてゐるやうに見え、繪畫がかけないものだから、繪畫をそんなふうにして描いてゐたやうなものですと、私に說明して言つた。

折見とち子は最近色紙で人形を作り、その本物の人形を動かしながら幻燈に映して、隣家の子供達を集めて見せてゐた。私にも一度見て貰ひたいと言ひ、ある日、電氣器具を入れた箱をぶら提げてやつて來た。人形といつても簡單な人形ではなく顏はすべすべした物でつくり、着物も本物の銘せんとか縮緬の片れをつかひ、いかに手先が器用敏活に動くかがその人形の作り方でもわかつた。雪の降る日の光景で片田舍の一軒家に住むおばあさんの話であるが、そのおばあさんに二人の童女と童子がゐて村はづれの石ぼとけに、おにぎりを毎日お供へしてゐた。おにぎりは何時も夜にはいるとなくなつてゐて、石のほとけがお召しあがりになるのだらうとおばあさんも、童女童子もさう信じこんでゐた。雪はふかくふりつもり、童女達がおにぎりを

お供へに行くのにも、深雪で歩くことが困難な日のことであつた。併しお供へをしないわけに行かない、二人の童はやつと夕方になつておにぎりを石のほとけに到け、そして歸らうとすると、ふつと石のほとけの手が動いたやうな氣がして、眼を凝らして見てゐると、その手は急に何處かにむかつて、手招きをしてゐるふうに見えた。手招きをしてゐる遠方に眼をやると、途方に暮れたやうな旅の行商人がとぼとぼと一人で歩いてゐるのが見え、行商人は手招きの方にこんどは勢ひ好く歩き出し、石のほとけの前に辿り着くと息をもつかずにおにぎりを食べて了つた。石佛の頭に雪はつもり風は吹き荒んで、木々の枝を鳴らしてゐた。童女達は家に戻るとおばあさんに、石のほとけはおにぎりは毎日みんな旅人に食べさせてゐたのだと言ふことを話した、と、そんな話を映り變る畫面につれて解說を試み、折見とち子は幻燈の終つたことを私に告げ、私はぼかんと呆氣に取られて彼女の顏を見つめた。人形人形といひなさるから僕は美しい女の顏でも見せてくれるのかと思つたら、碌でもないおばあさんとか、旅人とか子供とかの人形で一向面白くありませんねと惡口は言ふものの、隣家の子供達を集めてこんな幻燈を作り、そこに毎日をあどけなく暮らすといふことは、折見とち子も心身ともに未だ童女だからだと、さう結びをつけなければ、外に言ひ現はす言葉もなかつた。

彼女は言つた、美人の踊りは子供に必要ございませんが、子供は旅人とか雪のふる日とかいふものに遠い物語を感じる者です。美女の踊りは日劇にでもいらつしつた方がいいでせうと笑つていひ、重い電氣器具を片づけはじめた。小說ではもはや僕は大家のつもりで自惚れてゐる

のに、かかる大家の前で臆面もなく古い話を幻燈でわざわざ説き明すといふことも大膽なことだと、私は笑ひながら言つたが、幻燈の雪はまだ書齋の中にちらついてゐるやうで、これはさりげない折見とち子の眞摯くさつた幻燈の解説のせゐだと思ひ、人間一人づつの對決ではやはり物語は生きるものかと、前髪がさがつた折見とち子の、屈托を見せずに用心ぶかい話振りに注意を向けた。彼女の美人ではないためのりこうさが何時も話題からはね返つて來て、美人でないための穴埋めをしてゐるやうであつた。ふしぎな素早い應答のあざやかさが、美人であるなしをいふ相手の批評をすぐ取り上げてしまつて、彼女は人には見えぬふふんといふ、鼻であしらふものを用意してゐた。

またの或日には折見とち子はサバランを作り、ブランデイの匂ひのするのを持つて來て、此間はわたくしの幻燈を見てくだすつたご褒美だといつて、お茶の受けにひろげて見せ、また或日には金澤で飴で煮つめる胡桃の折を提げ、これは母が煮てゐたのを見覺えて作つた物ですと、飴煮のむつかしい胡桃料理の一端をも發表した。私はこれらを賞美してあなたの紙芝居よりこの方が、よほど甘美しいとまた惡口を叩いたが、手先のわざと頭をつかふ事に均等を持つ彼女は、大概の事はあざやかにやつて退けてゐた。洋裝類は勿論、此間夏の白い手袋をして來たので、それはちぢんでゐて見にくいといふと、いいえ、これは手編みでございますから、ちよいと見にはちぢんで見えますと、私はいきなり次の文句を取り上げられて了つた。成程、あなたは手袋までお編みになるんですかと、手のわざでは人後に落ちない彼女に畏敬の念ひを持つた

のである。

折見とち子は以前勤めたことのある大きな出版社に、折よく復職することが出來たといひ、わたくしは充分に働き、また怠ける事もわすれない心算ですと、面白い奇警の言葉をのべたが、才色すぐれた若い婦人が多い世の中に折見とち子の復職がゆるされるといふことは、よくよくの人材が認められてゐたからであらう。ここでも、才學が用ゐられることの愉しさが私の耳をよろこばせた。折見とち子なら父君の魚拓をとるところも見てゐたし、この人に魚拓を賴んで見たらどうだらうと私は思ひ、先づこの人のほかに賴んで見る人もないやうだ、私は折見とち子に手紙を書いてこんどの本の內容には、一尾の朱いさかなが、結局死ぬことになり、空から頭を突つ込むやうにして海に降下して行く、さういふ精神力を持つた魚拓がほしいのですが、願へたらその魚拓を一枚とつてくれませんか、實はその小說は一尾の金魚に托して私の昔知つた女の人を描かうとしたもので、たわいない小說ではあるが、そのたわいなさが書いたあとまで私に宿つて、困つてゐるとでも言へる小說なのです。作家といふ人間は小說を書き終つてからも、その小說に未練がましく絕えず搖りうごかされてゐるあひだ、たわいないまま小說の何處かが生きてゐるのとでも言へば言へるので、一尾の金魚を表紙にただ一つだけいりようなのです。魚拓は普通の魚拓のやうにのつぺら棒にとることを避け、さかなを斜めにつかひ、鱗は

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com